

國學院大學学術情報リポジトリ

ゼミ活動報告：平成29年4月～平成30年3月

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002327

ゼミ活動報告（平成二十九年四月～平成三十年三月）

『石井ゼミ』

本年度の石井研士教授の「宗教学特殊研究Ⅱ」では、現代における宗教表象の展開をテーマに授業が行われた。

前期は国内外の若者の間で親しまれているポップカルチャーや、映画作品などの各種メディアと宗教に関するコンテンツが取り上げられた。そして、それらの宗教表象に重点を置きつつ、各作品に対する比較、考察そして議論が行われた。現代において、宗教は伝統的な文化のみならず多種多様なかたちで存在している。特に、個人が各々の自由意思によってコンテンツにアクセスが可能な高度情報社会では、各種メディアから宗教に接するという機会が増加している。各種コンテンツの中に、現代社会の死生観や転生観、その他宗教的観念が見受けられるかを考察した。

分析対象については、受講生の問題意識や関心に基づき選出を行った。ツヴェタン・トドロフ『幻想文学

論序説』と現代の宗教表象の親和性、アニメ「機動戦

士ガンダム 鉄血のオルフェンズ」における宗教的知識および宗教観の運用、西垣通『聖なるヴァーチャルリアリティ』が論じるヴァーチャル世界の聖と俗、アニメ「機動戦士ガンダムユニコーン」におけるカミ観念の表象、映画「P」で問われる「宗教」の功罪など、多種多様な作品に至った。

後期は、前期に引き続き現代の各種コンテンツにおける宗教表象を主題としながらも、更なる発展した討議が交わされた。映画「君の名は。」における巫女・神社の表象から見る神・聖性の考察、映画「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。」の作中世界における死者と生者の救済、アニメ「魔法少女まどか☆マギカ」における人身供儀、およびケガレ表象、漫画・アニメ「ひぐらしのなく頃に」シリーズに見るループに基礎づく世界観や作中世界の構造分析を通して、議

論が行われた。

石井教授からは論文「ポップカルチャーと宗教—マンガ・アニメにおける『生まれかわり』—」に関する発表も行われ、受講生とともに手塚治虫『火の鳥』や、車田正美『聖闘士聖矢』そして映画『君の名は。』などの、ポップカルチャー黎明期から今日に至るまでの作品に見受けられる「生まれかわり」表象の比較と検討を行った。

また、OGである大道晴香氏による「〈悪の科学〉とは何か—一九七〇・八〇年代の「スーパースター戦隊シリーズ」に見る〈善／悪〉の様相」の発表も行われた。「オカルト番組を巡るメディア言説—〈オカルト〉の成立および〈スピリチュアル〉へ至る変遷—」現代日本の宗教性について『ボランテアと宗教』など、ゼミ生の修士・博士論文へ向けた発表も随時行われ、受講生から書籍や各種コンテンツへの批評、文献調査やインタビュー調査、論文執筆に向けての指摘がなされた。本演習を通して、多様な現代の宗教現象の様々なあり方への見識を深め、多角的な思考力を養うことができた。

(M1・今井)

【井上ゼミ】

平成二十九年度の井上順孝教授の「宗教社会学演習」及び「宗教社会学特殊演習」は、各ゼミ生の研究分野に関連する文献の発表及び討論を中心に進められた。

前期は、宗教社会学の研究書籍を各ゼミ生が読解・発表し、質疑応答・意見交換した。取り上げた文献は、「脳はいかに意識をつくるのか—脳の異常から心の謎に迫る(デオルク・ノルトフ)」「宗教と学校(橋本俊詔)」「ヒトはなぜ神を信じるのか(ジェシー・ベリング)」「宗教と公共空間—見直される宗教の役割(島蘭進、磯前順一)」「ポスト多文化主義教育が描く宗教—イギリス(共同体の結束)政策の功罪(藤原聖子)」「『イタコ』の誕生—マスメディアと宗教文化(大道晴香)」「徹底検証 日本の右傾化(塚田穂高)」「慈悲深き神の食卓(八木久美子)」「(カッコ内は著者) 等である。

後期は、日本と異なる新しい視点からのアプローチを目的として、英語論文の読解・発表をした。取り上げたテーマは「韓国におけるハラールに関する現地ムスリマの意識調査結果」「イギリスにおける宗教教育」

「スピリチュアリティ・宗教・文化と平和」「現代日本の漫画、アニメ、宗教」「古代近東を渡る竜の追跡」「神道（ハーディカ氏（後述）著作）」等である。また、國學院大學研究開発推進機構十周年記念公開学術講演会へ参加し、「英語圏における神道研究のいま（講師／ハーバード大学ヘレン・ハーディカ氏）」「縄文の哲学思想（講師／國學院大學名誉教授小林達雄氏）」を聴講した。特に、ハーディカ氏の講演は英日同時通訳でなされ、神道をはじめとする日本文化が、海外の研究者の視点でどのように捉えられているのかを生々の声で聴く貴重な機会となった。

このほか、井上教授より参加した学会や調査の報告を随時伺った。また、金曜四限のゼミ終了後に有志でサブゼミを開講し、本ゼミでの議論の整理、宗教学全般の基礎知識の習得、参加者各自の研究の進捗状況の報告及び意見交換などをした。

（M1・川口）

【遠藤ゼミ】

平成二十九年度の遠藤潤准教授の「宗教学研究Ⅰ・

宗教学特殊研究Ⅰ」では、社会史・思想史的視点からの宗教・信仰の理解をテーマとして、演習授業が行われた。今年は昨年より参加学生の人数が増え、博士課程後期の学生四名、博士課程前期の学生十名、聴講生一名と学生層の幅が広く、研究テーマに関する自由討論では活発で自由な意見が出された。

前期のはじめに、玉野和志編『ブリッジブック社会学』と盛山和夫『社会学の方法的立場・客観性とは何か』の内容を題材として、社会を理解する方法として宗教との関連性を考察しながら客観的な視点をもって宗教学とは何かという点に関する自由討論を行った。

次に各学生は、自分の研究テーマに関心のある対象文献を選び、理解した点や問題意識を持った点をまとめ、発表を行い、討論へ移った。内容は、『新体系日本史十五 宗教社会史』の「第一章 日本宗教形成と社会」・「第二章 中世宗教の成立と社会」、『高取正男著作集二 民俗の日本史』の「神仏習合―比叡山と園城寺」・『高取正男著作集一 宗教民俗学』の「幻想としての宗教」、黒田俊雄『王法と仏法―中世史の構図』

の「日本宗教史上の「神道」、平雅行『岩波講座 日本通史第八巻』の「鎌倉仏教論」、上島亨『日本史講座 第三巻 中世の形成』の「中世国家と神社」、高埜利彦『講座 日本歴史五 近世』の「江戸幕府と神社」・「江戸時代の神社制度」、安丸良夫『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈―』の「神道国教主義の展開」・「日本の近代化と民衆思想」の「第一章 日本の近代化と民衆思想」・『安丸良夫集三 宗教とコスモロジー』の「民衆宗教と「近代」という経験」・「現代日本における「宗教」と「暴力」」、宮田登『宮田登 日本を語る十巻「王権と日和見」の「王権支配の民俗的基盤」、小松和彦『憑霊信仰論』の「山姥をめぐる―新しい妖怪論に向けて―」、その他権田直助に関する研究として「幕末維新期の国学者と洋学者―平田篤胤・権田直助と安藤文沢・太郎―」と題した発表が行われた。

後期は、遠藤准教授のご自身の研究テーマである平田国学研究の内容と今後の展開についての発表が一回あり、その後各学生の研究テーマによる発表が行われ、史実確認や問題意識の所在等、自由討論がなされた。

【岡田ゼミ】

平成二十九年度に開講された岡田莊司教授の「神道史特殊研究Ⅰ（演習）（月曜日四限）」では、昨年に引き続き古代の国家祭祀と天皇祭祀を基本軸にしながら祭祀体系の展開を考察した。主に七世紀後半、古代律令国家の祭祀体制が確立していく過程と天皇祭祀権について理解を深め、「天皇と神々の循環型祭祀体系論」を基礎に、その具体事例を検討することを目標とした。

前期では具体例の検討として主に「神祇令」をテキストとし、班幣行事や祈年祭、相嘗祭をとりあげた。岡田教授の講義と院生の個人発表が行われ、質疑応答や岡田教授のご指導により、古代の国家祭祀への理解を深めた。

そのうえで、後期は前期の授業内容を踏まえつつ「延喜式」をテキストとし、神今食、新嘗祭、大嘗祭を対象に天皇祭祀を考察した。授業時の院生の発表では古

代の研究はもちろんの事、近世の大嘗祭についても発表があり、有意義な討議を行うことができた。また、大嘗祭研究の史料に基づき大嘗祭の際に用いられる神殿を教室で再現し、文献的かつ実証的に大嘗祭への理解を深めた。

また、論文指導（月曜日五限）においては、ゼミ生の個人研究の発表を行い、日ごろの研究成果の発表の場として用いた。各時間ごとにゼミ生の発表、質疑応答があり、最後に岡田教授からご指導をいただいた。

当ゼミでは夏季休暇中に個人発表会を行うのが通例となっていたが、今年は後期授業の論文指導の時間を夏季休暇中の研究成果発表会として行った。

また、十二月に行われる春日大社の春日若宮おん祭には岡田教授をはじめとした先輩方、有志のゼミ生で見学を行い、各々授業で学んだことや個人研究への理解を深める機会とした。

（D1・島崎）

【阪本ゼミ】

平成二十九年度の阪本は丸教授の「神道史研究Ⅱ」

および「神道史特殊研究Ⅱ」は火曜五限に行われた。

本講義は、博士課程後期一名、前期三名の阪本ゼミ生に、他ゼミ生、聴講生を加えて行われ、受講者が各自のテーマに沿った研究発表を実施し、討議を行った。

他ゼミ生や聴講生による発表やコメントも活発に行われ、各発表後には阪本教授より懇切なご指導を賜り、参加者は自身のテーマのみに限ることなく、より幅広く多角的な視点をもって神道史への理解を深めることができた。また前期最終講義において実施された筆記試験を通じ、各自の課題を再認識した。

引き続き行われる火曜六限の「論文指導演習」においては、ゼミ生が「扶桑教初代管長・宗野半」、「岩倉具視と国学者」、「権田直助の伝記的研究」、「近現代の即位大礼」等、近世・近代神道史に関わる各自の論文テーマについて研究発表を行い、阪本教授にご指導をいただきながら研究を深めた。なお、本演習においては明治神宮国際神道研究所・戸浪裕之研究員、中野裕三研究員、研究開発推進機構・神杉靖嗣客員研究員、小林威朗共同研究員、東郷茂彦共同研究員、研究開発

推進センター・半田竜介ポスドク研究員、秋葉山神社・

ご意見をいただいた。

(M1・櫻井)

河村忠伸権禰宜ら多くのゼミ出身者にもご出席をいただき、論文の内容や方向性をはじめ、各ゼミ生の研究

【笹生ゼミ】

今年度、火曜日第四限に行われた笹生衛教授による

内容に即した先行研究の選択や実際の論文執筆に関する諸注意事項等、数多くの貴重なるご意見を頂戴し、受講者は自身の課題と向き合わせられつつ研究を深化させ、切磋琢磨した。また時宜に応じ阪本教授による問題提起も数回行われ、受講者は各自の研究テーマと関連づけながら議論を行い、理解を深めた。六月には演習後にジャーナリスト・斎藤吉久氏に御代替についてご講話をいただく機会があり、皇室に関する諸問題について見識を深めた。

また、ゼミ生は学術メディアセンターにおける研究

加えて、笹生教授による、国内における最前線の考古学的成果の紹介のみならず、本年七月十七日ロンドンにおいて催行されたジャパンソサエティー（日本協会）主宰「カーメンブラッカー女子記念講演会二〇一七」および七月二十日ノリッジ・セインズベリー日本藝術研究所での、笹生教授講演「祭祀遺跡―日本

開発推進機構の定例研究会にも参加させていただき、近世・近代神道史をめぐる最先端の研究動向とその水準に直接触れながら学びを得、各自の研究へ多くの示唆と刺激をいただいた。

なお、本ゼミにおいては、ゼミの先輩である研究開発推進センター・上西亘助教にもご出席をいただき、

今年度、火曜日第四限に行われた笹生衛教授による演習「神道史研究Ⅱ」においては、①神道史・宗教史上における主要な祭祀（一例としては三世紀―五世紀における「祖」の祭祀）の具体を明らかにし②文献および考古学遺物等の具体的根拠からそれらを分析・類推③検討結果を、事象の背景に存在する環境（環境変動）、社会構造と神観念、社会の構成員の価値観等から多角的に分析④分析を反映させつつ時系列のうちに祭祀の変遷を概観、意義や画期をさぐる等の試みが行われた。

の神社と祭祀の起源」の内容と成果がテキストとして活用され、学生各自が研究課題をめぐって考察を深めるにあたり、新たに広く、異文化（交流）の視点を備える良き機会となった。

同・第五限の論文指導では、日本人の動物観―文献からみる、動物に対して日本人が抱いていた精神性の考察（櫻田）・神郡の成立に関する研究―東国の香取、鹿島、安房神郡の景観分析と大和王権の古墳祭祀との比較考察（弘田）・近世における藩主の神格化とその歴史的背景―津輕藩四代信政を例に（宇庭）・大嘗祭の意義―「神の坐」および「宿り」の視点から（風早）・獅子・狛犬の成立と史的背景―儀礼・楽と神祇祭祀との関連を中心に（根岸）・中世・近世の墓と古代の連続性―塚と古墳の二次利用を中心に（上野）・古代・中世の祭祀と舞楽、その起源と変遷―春日・住吉・石清水を例として（笹村）・神殿と支配する地域との考察（鈴木）と、きわめて多岐に亘る学生の研究テーマを巡り、笹生教授の具体的な助言・指導のもと活発な討議が行われた。自由意見

の交換にとどまらず、それぞれが蓄えた知見を公開し、共有する有意義な場となし得た。議論にはゼミの先輩にあたる安藝・市川両氏が参加、医学および考古学の立場から貴重な助言をいただいた。（M2・風早）

【武田ゼミ】

平成二十九年度武田秀章教授の「神道古典研究（演習）」「神道古典特殊研究（演習）」では、西宮一民編『古事記（修訂版）』を中心とし、「古事記編纂の意味を探る」と題して、古事記序文の購読と解釈について討議した上で、古事記研究史上に於ける解釈との比較検討を主に行った。

購読の発端は、「古事記序文は偽作であり、本来序文としてではなく、上表文としての目的を持っていた」という三浦佑之氏の研究理解について、本当に序文は偽作なのだろうかという問題提起を受けたことによる。よって、改めて顧みられることの稀な古事記序文の文章を一つ一つ辿りながら、「古事記成立について」「天武天皇の古事記編纂の云われ」「表記方法につい

て」といった古事記全体に関わる根本的な理解について、ゼミ生全体で記載内容を確認した。そこから読み取れる解釈でどのような論が過去の研究にあり、それを通してゼミ生一人ひとりが感じた考えを表明して討議するという手法であった。

前期は、西宮一民編『古事記(修訂版)』に記載される序文をもとに全文を購読し、その中で、序文に引用された古事記本文の内容についても一緒に触れることで、改めて古事記の本文と序文が関連づけられていることを確認した。よって序文は古事記の編纂のいきさつ、及び表記方法の特殊性について説明する上で非常に重要であることから、上表文ではなく序文としての側面が強いのではないかという点が明らかとなった。

後期は、古事記序文と本文の強固な関連の理解をさらに深めるべく、本居宣長『古事記伝』をもとに、序文をどのように捉えていたのかという点を確認。さらに宣長の『古事記伝』編纂についての研究を行った小林秀雄氏の『本居宣長』の一部をゼミ生全員で輪読し、『古事記』について宣長がどのようなスタンスを採っ

ていたのかという点を確認した。また、宣長以降の古事記に於ける研究史を解説し現在主流となる神野志隆光氏の古事記と祭祀との関係を否定する論への再検討が必要ではないかという点や、古事記学講義に於いて、序文が重視されないことについての懸念を示す場面もあった。

また当該授業では西岡ゼミの学生1名、聴講生1名、特別研究生2名が参加し、神道学の立場のみならず、異なった多様な視点からの講義への発言が印象的であった。

(M2・下山)

【西岡ゼミ】

平成二十九年度は西岡教授の国内派遣研究に伴い、「神道神学研究Ⅰ」の開講はされなかったものの、月一回の論文指導演習及び、ゼミ合宿は例年通り行われた。

尚、ゼミ生(後期課程三名、前期課程一名)は阪本是丸教授、武田秀章教授、遠藤潤准教授の演習にてそれぞれ御指導を賜った。

西岡教授の論文指導演習では、神道宗教学会、日本

宗教学会発表を念頭に置きながら「山崎闇斎の神学について」「近代初期の神葬祭の研究」「日本書紀」本書と一書に関する研究」「宝暦事件と竹内式部について」に関する発表がなされ、神道古典、神道神学、神道思想史といった分野及び視点から、各自意見が出され、西岡教授より、それぞれに応じた御指導を賜った。

本年度のゼミ合宿は九月三日、四日に福井県で行われ、一日目は幕末の志士であり、山崎闇斎の学流を汲む橋本景岳の史跡を中心に福井市内を探索。夜はゼミ生の研究中間報告が行われ、報告後には闊達な議論がなされ、後、西岡教授の御指導を仰いだ。

二日目は、本年度で開山一三〇〇年を迎えた勝山市に鎮座する日本一の苔庭と日本最古の石で舗装した道を持つ、我が国有数の古社である平泉寺白山神社を参拝し、宮司の平泉隆房金沢工業大学教授より手厚く案内をして頂いた。

白山信仰はもとより、中世に於ける神仏習合や、修験道、歴史的経過により大きく変化する神社の境内や建築物について実際に見て、感じる事が出来たと思う、

さらに、宝物館では同社所蔵の「三社託宣」の掛け軸を見せて頂き、神道の道徳観念が近世に於いて広く享受された事を確認出来た。同社を通じ、神道史、神道思想史の一端を実地で学ぶ事が出来、充実したゼミ合宿であった。

(M1・大貫)

